

教育学研究科・グローバル教育展開オフィス

呉 尚峻

国際学会：6th EMI Symposium/3rd Annual ELINET Conference 2025

参加地・期間：Oxford 2025年7月3日～7月4日

発表題目：Decolonial Theory Meets Japan: Rethinking EMI Policy in Context

成果の概要

私は、2025年7月に英国オックスフォード大学にて開催された「6th EMI Symposium / 3rd Annual ELINET Conference 2025」に参加し、「Decolonial Theory Meets Japan: Rethinking EMI Policy in Context」という題で口頭発表を行った。本発表では、日本の高等教育における国際化、及び英語による授業政策を対象に、従来の植民地主義的構造の再生産としての側面を批判的に捉え、クワン・シン・チェンの「脱帝国」や日本固有の哲学的枠組みに基づいた脱植民地主義的視座から再構築する必要性を論じた。日本は被植民地であった経験を持たないが、近代以降西洋の知的枠組みに強く影響されており、その中で自国の帝国的過去への無反省さや、アジアに対する知的優位性の無自覚な再生産が問題となっている。こうした複雑な立ち位置を、脱植民地理論における「西洋 vs 非西洋」の二項対立を超えて位置づけ直す試みとして、参加者から一定の関心と共感を得ることができた。

会場では、ヨーロッパを中心に、アジア、中東、アフリカからも多くの研究者が集まり、英語教育政策、言語的公正、多言語主義、国際英語と英語教育の交差など、幅広いトピックについて活発な議論が行われていた。特に印象に残ったのは、Mona教授による発表である。彼女はドイツにおける言語教育カリキュラムと教材の変遷を回顧しつつ、それらがGlobal Englishesに対する態度の変化をどのように反映しているかを考察していた。発表では、言語的標準という概念が依然として改革の障壁として機能していることに疑問を呈された。この理論的枠組みは、私自身がEMI政策における英語観の再構築を目指す研究とも強く響き合うものであった。

会場はオックスフォード大学の教育学校舎内で、格式のある雰囲気的空間であった。緑豊かな中庭と、長い歴史を感じさせる講堂に囲まれながら、研究者たちが国籍や立場を越えて自由に議論を交わす光景は、私自身の研究が国際的な文脈の中でいかに位置づけられ得るかを体感させる経験となった。

このたびの学会参加は、本支援を受けたことで実現した。経済的な支援のみならず、「若手研究者が国際舞台で自身の研究を発信し、批判的対話に参加することの意義」を強く実感させられる貴重な機会であった。研究テーマの構造的意義や論点の整理はもちろんのこと、自らの立場性や、他者の経験から学ぶ姿勢の重要性を再確認することにもつながった。

今後は、今回得た国際的な視点や他地域の研究事例との比較を通して、日本における国際化政策の特殊性と限界をより深く掘り下げていきたい。また、会期中に得たネットワークを活かし、今後は共同研究や国際学術誌への投稿など、より広い場での発信にも取り組んでいく予定である。学会参加を通じて得た刺激と反省は、今後の研究活動を内省的かつ批判的に進めるための原動力となっている。